

# 田代三喜作字資料『三帰一流』影印

佐藤 貴裕

## 一 概要

『三帰一流』とは、二〇〇六年十二月に京都の古書店より購入した薄冊の名である。大きさは二三ミリ×一三五ミリで、表紙には柿渋が引かれるが、本文と同趣の紙質の簡素なものである。本文は一〇丁袋綴じだが、最後の一丁は、表半丁が切り取られている。その裏に「于時応承二年／五月吉日」との年月記がある。この丁のあとに袋綴じ一丁が裏表紙として付けられている。

内容は、田代三喜の作とされる、薬種名を漢字風に暗号化した「作字」を大書し、相当する薬種名を片仮名で右傍に付し、薬効を片仮名で簡潔に小書きしたものである。このほか、和訓ないし和らげを左傍に付すこともまある。なお、「作字」としての内容は八丁表までである。

## 二 位置づけ

作字を大書し、右傍に付訓するスタイルはまさに『百一味作字』と同一だが、『百一味作字』は各部首（構成要素）の意味が簡潔に記されるだけの、字解に徹するものである。

例活 イハ気也。天ハ痰也。リハ痢也。活ハ生也。

（句読は佐藤による。以下同じ）

これに比べれば、『三帰一流』は、効能が記される点でより医書らしいが、その効能は簡潔にすぎるともいえる。

矢数道明（一九七九）に収められた『薬之部』（仮称）では、薬種の正格な漢字表記・作字・適応症の詳細な説明がつき、最後に本草書風の記事が朱書される。

人參 例活 右之寸関虚細ニシテ神氣カイ無ニ、肺虚ノ咳嗽痰吐ニ、気虚ノ目暈ニ、腎弱シテ赤白痢ニ、諸病共ニ正氣衰テ

細々絶死スルニ、是諸氣七情之君棄トス。脾肺陽氣不足ヲ治、不血液虚腎水之衰タルニハ、左脉虚細ニシテ右寸関実強ナルニ、喘痰シテ常ニ息タワシキニハ或久用ハ氣痰生ルモノ也味甘温無毒。塩水ニ浸、荒皮ヲ去、炙シテ用也

島田勇雄（一九七三）が紹介した『三全能毒集』はまた別種で、作字・正格漢字・能毒記事・字読の順に記述されるという。なお、島田は、能毒に傾く内容からこの書を近世前期のものかと推測している。序には『百一味作字』かそれに類する書をもとに補足したことが記されており、田代三喜の著作ではない。適応症は大幅に簡略になっており、ほぼ薬効しか記されない。

例活輕 人參味甘温無毒（略）

字読曰 氣ヲヒキタテ、痰ヲ切り、痢ヲ留、絶死ヲ治メ、目暈ヲ定メ、胃ヲ補、嘔ヲ止（島田一九七三による）

以上、「作字」に重点をおいた書に『薬之部』『百一味作字』『三全能毒集』があるわけだが、これに『三帰一流』が加わることになる。内容から推すと、『薬之部』から『三全能毒集』のようなのが、さらに『三帰一流』のようなものが派生したと思われる。『百一味作字』は字解に徹するものとして離れた位置にあることになる。ただ、『三全能毒集』の「字読」は、『百一味作字』の字解を意識したものともできよう。

適応症を大きく欠いた『三全能毒集』『三帰一流』は、漢方医学書としては不十分な書といわざるをえないだろう。患者の体質（証）の観察をもとに処方を決定するのが漢方の基本だからである。ただ、そうしたことを踏まえれば『三全能毒集』は、証に密接にかかわる本草的な記述がある点でまだ有効性があるということになる。効能しか記さない『三帰一流』は、正規に医学を修めたものが備忘のために参照するものかと思われる。

### 三 語学的価値

三喜の「作字」が、彼の著作やその転写本だけでなく、『三帰一流』のように他者によっても伝えられた点が注意される。また、内容・構成上の変更を遂げていることにも注目したい。背景にある医療レベルは分らないけれども、それ相応に医療現場で三喜の作字が使用されたことを示すからである。そうみれば『三帰一流』の年月記の価値は高いものとなる。承応二（一六五三）年に、たしかにそうした場があったことを示すからである。

以下、言語事象について簡単にみておきたい。

四つ仮名については、検討するに十分な語例があるわけではないが、それでも医書として「腎・筋」は多くあらわれる。すでに

混乱しており、「腎」では「ヂン・チン」が多く、「筋」では「スジ」と表記されやすい。あるいは語頭と語中尾とで書き分けようとしたものだろうか。ただ、「一オ一」に「ジンヲツヨクシ」とあるのに、次行では「ヂンヲツヨク」とあるなど、やはり単純に混乱しているのを見るのが実情にあうだろう。なお、「頭痛」については「ツツウ」で安定しており、「通ず」も「ツウズ」で安定しているようである。が、「ツウツ」（ハオ三）に見える例もないではない。また例数は少ないが、「スイカヅラ」（一ウ三）に対して

「モトナシカヅラ」（五ウ三）のような例もあった。

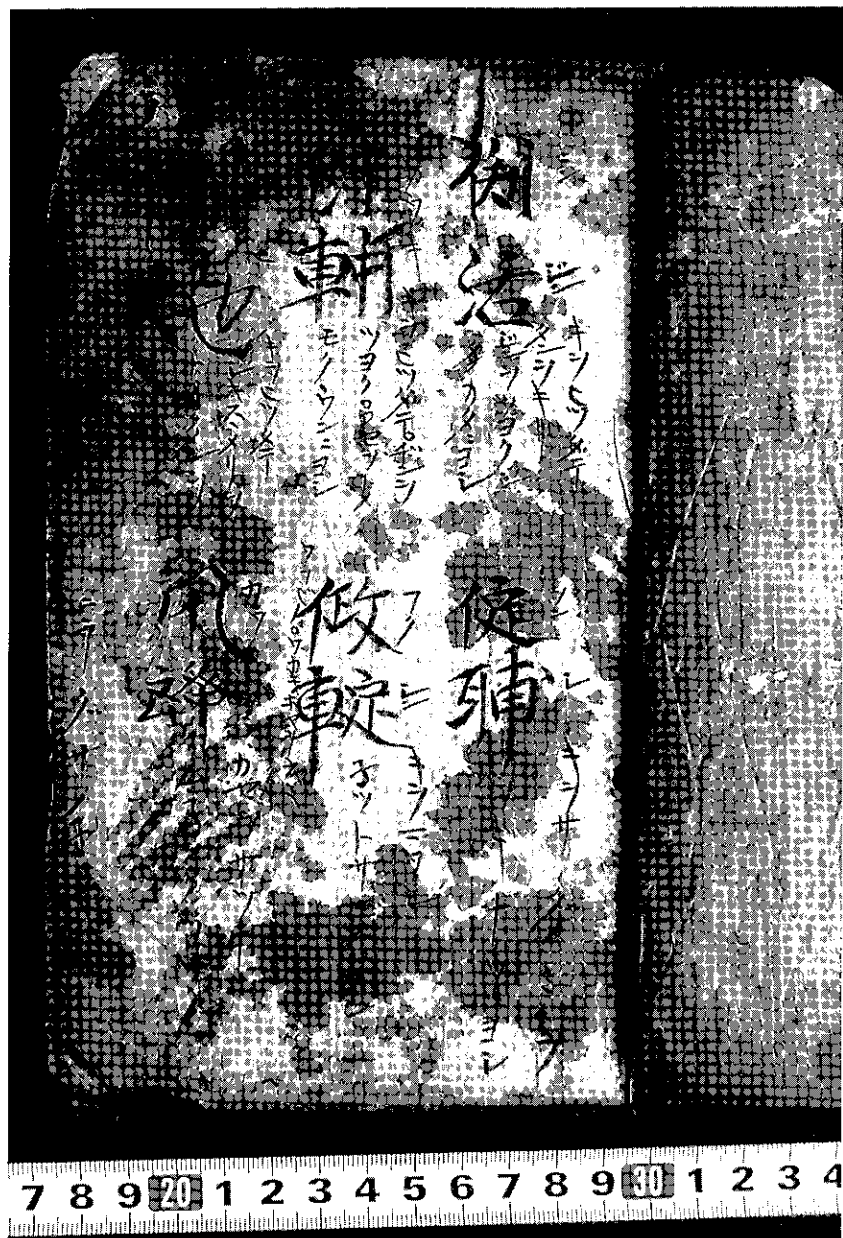
連声については、「ヂンノネットサマシ」（腎の熱を冷まし）のような舌内入声のものが多く見られる。撥韻尾のものでは「タンヲキリ」（痰を切り。「一オ一」・「ジンヲツヨクシ」（腎を強くし。「一オ一」など非連声表記が普通だが、ままた、「タンノキリ」のように見えるものもある（四オ二・ハオ二）。ただ、「ンノ」で「ヲ」に対応するようにも見えるので、ンの誤脱を考える必要もあろうか。結局、t韻尾の場合とでは連声の現われ方が異なると見られる。

形容詞ウ音便の短呼形について。「ジンヲツヨクシ」（一オ一）との句が頻用されるが、なかには「チンヲツヨシ」（五ウ一）・「ヂンノツヨシ」（五ウ三）など、ク語尾が記されないものもある。

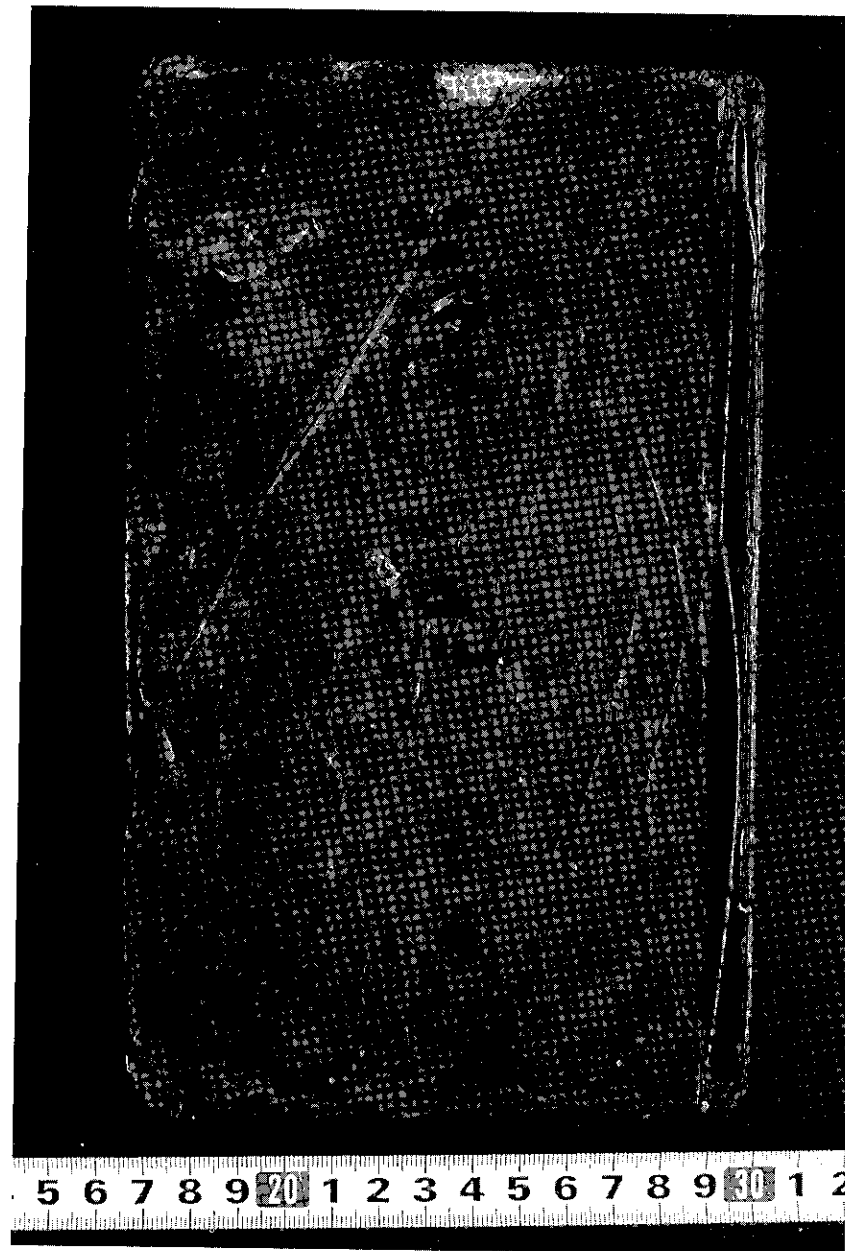
ウ音便の短呼形をそのまま写したのであろう。『三帰一流』のうに短く、かつ定型句がくりかえし出てくる資料であるにもかかわらず、口語形と原形とがまじるあたり、書写者の規範が揺れていることになるが、これは教養の程度を反映するものでもあろう。類することは、連声の表記法を、元の形を記すか、連声形を記すかにも現れていよう。

### 参考文献

- 佐藤貴裕（二〇〇六）『医家・田代三喜の造字』国語文字史研究会編『国語文字史の研究』九 和泉書院
- 島田勇雄（一九七三）『中世末・近世初期の医学書・本草書に見られる「一字銘」について』『神戸大学文学部紀要』二一
- 矢数道明（一九七九）『近世漢方医学書集成 第一期第一巻 田代三喜』名著出版



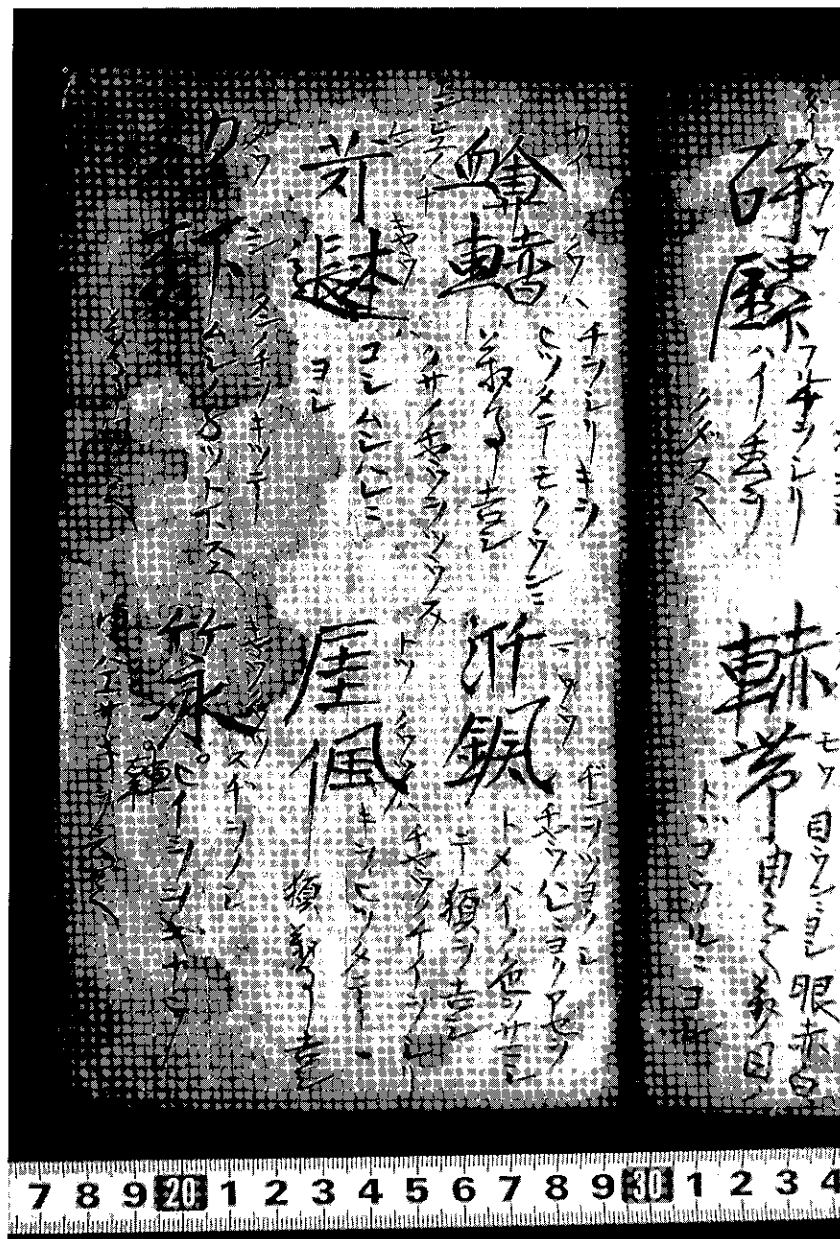
一才



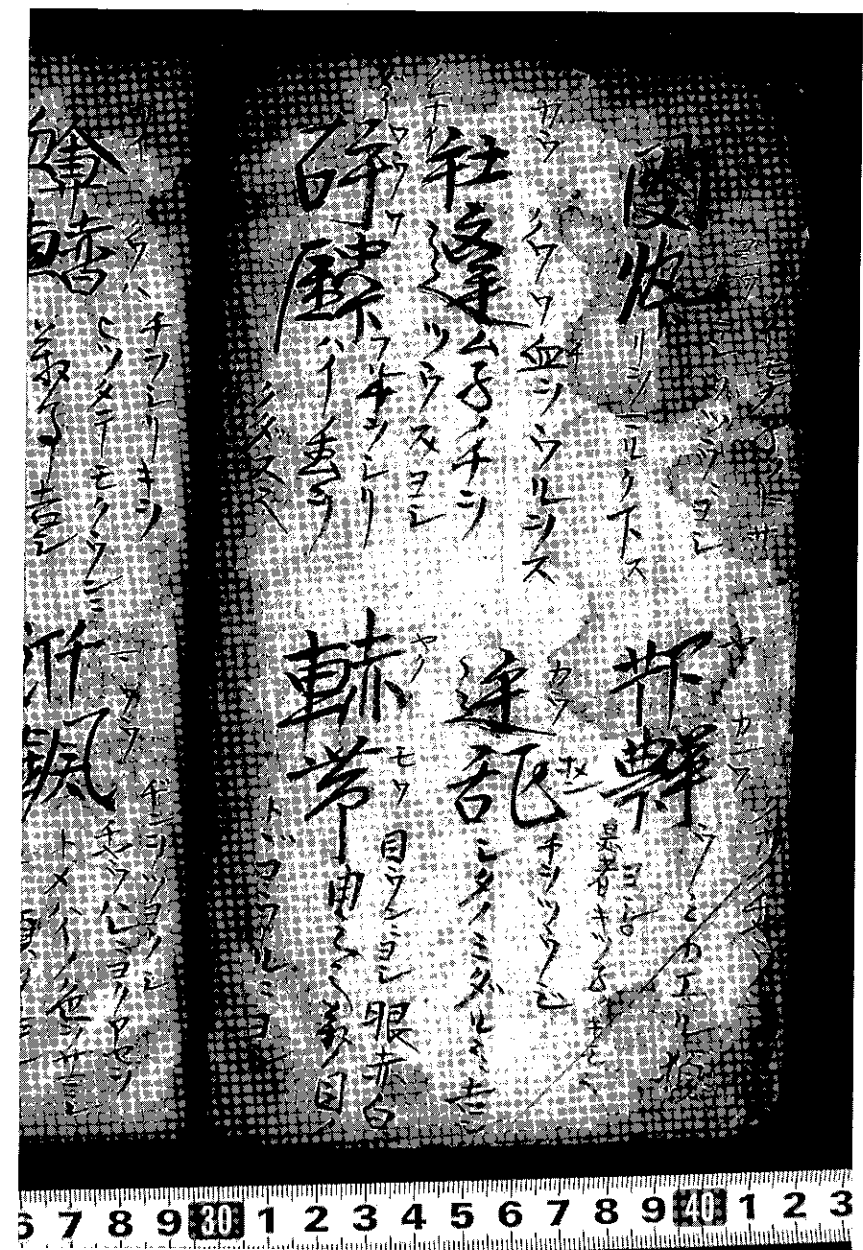
表紙（見返しは省略）

二才

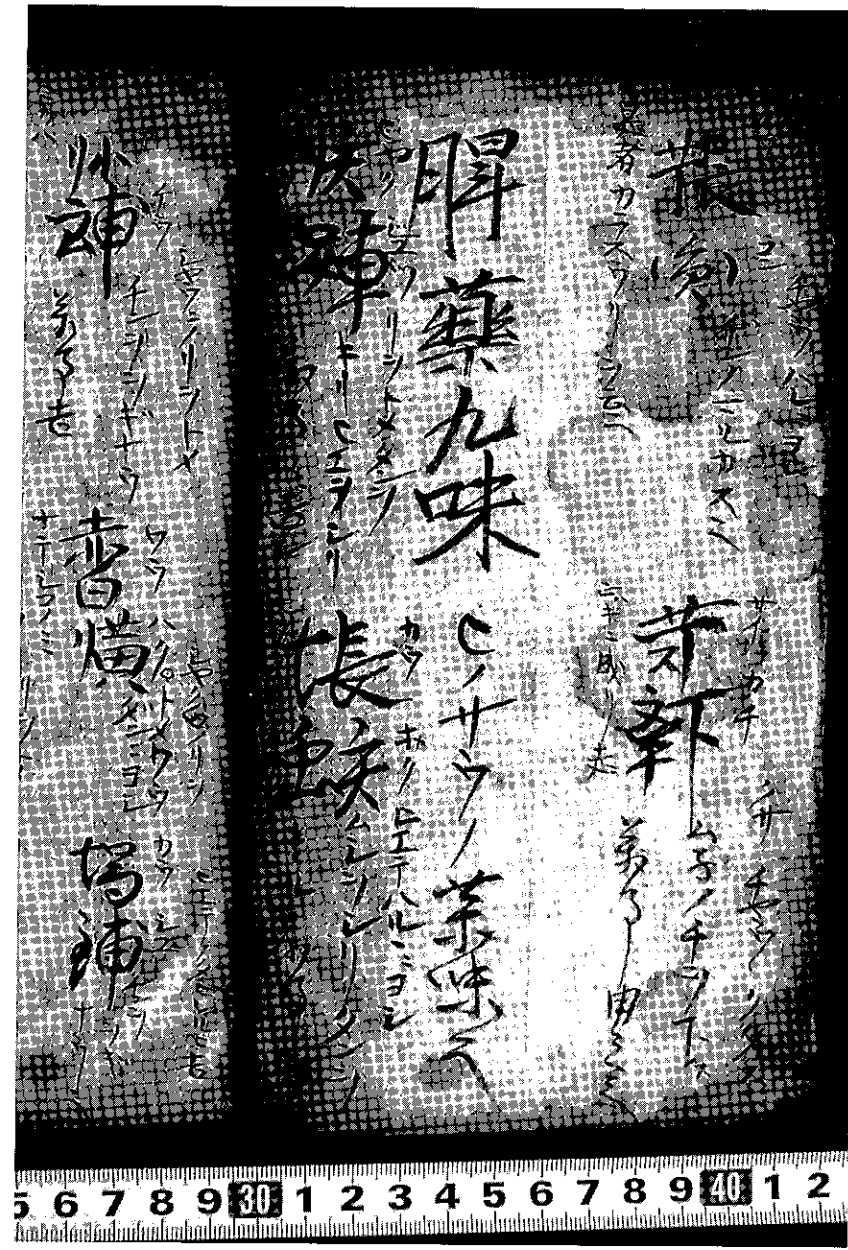
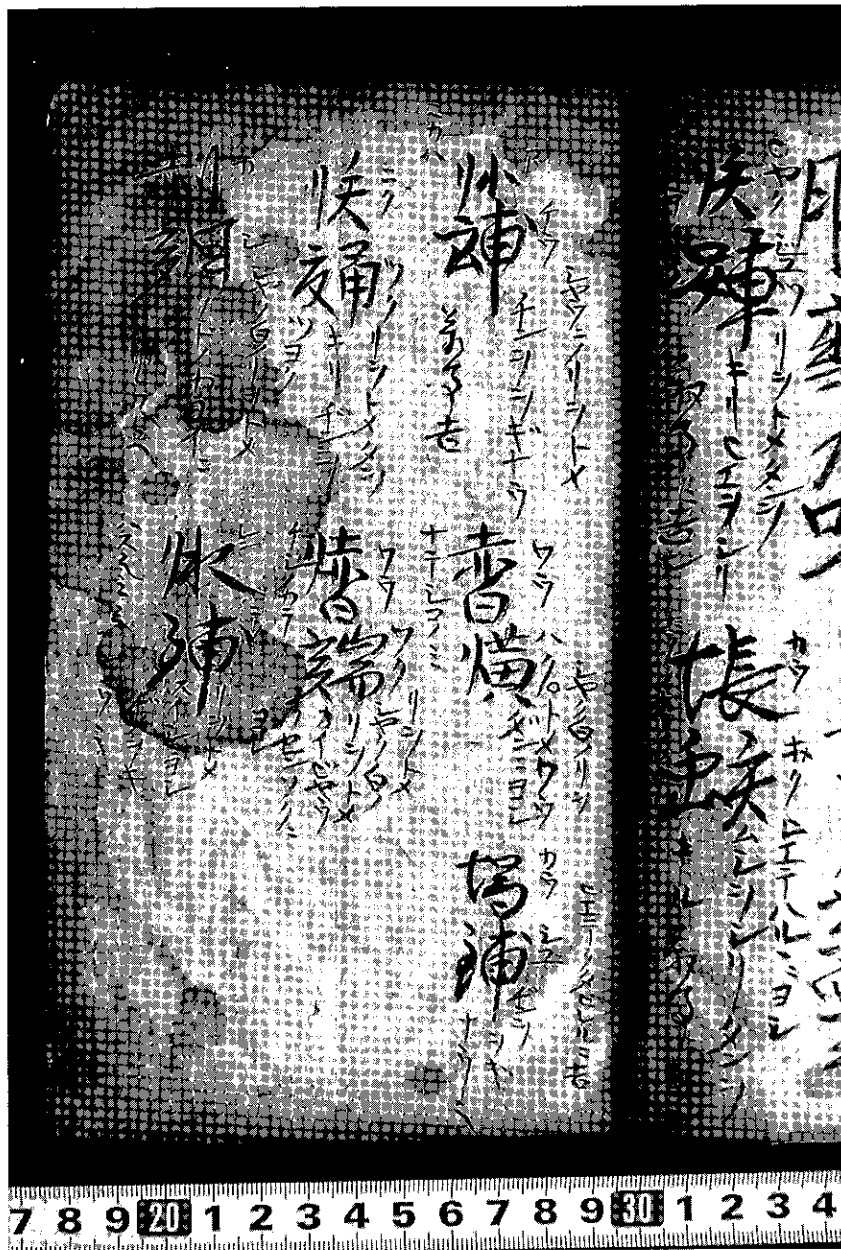
一ウ

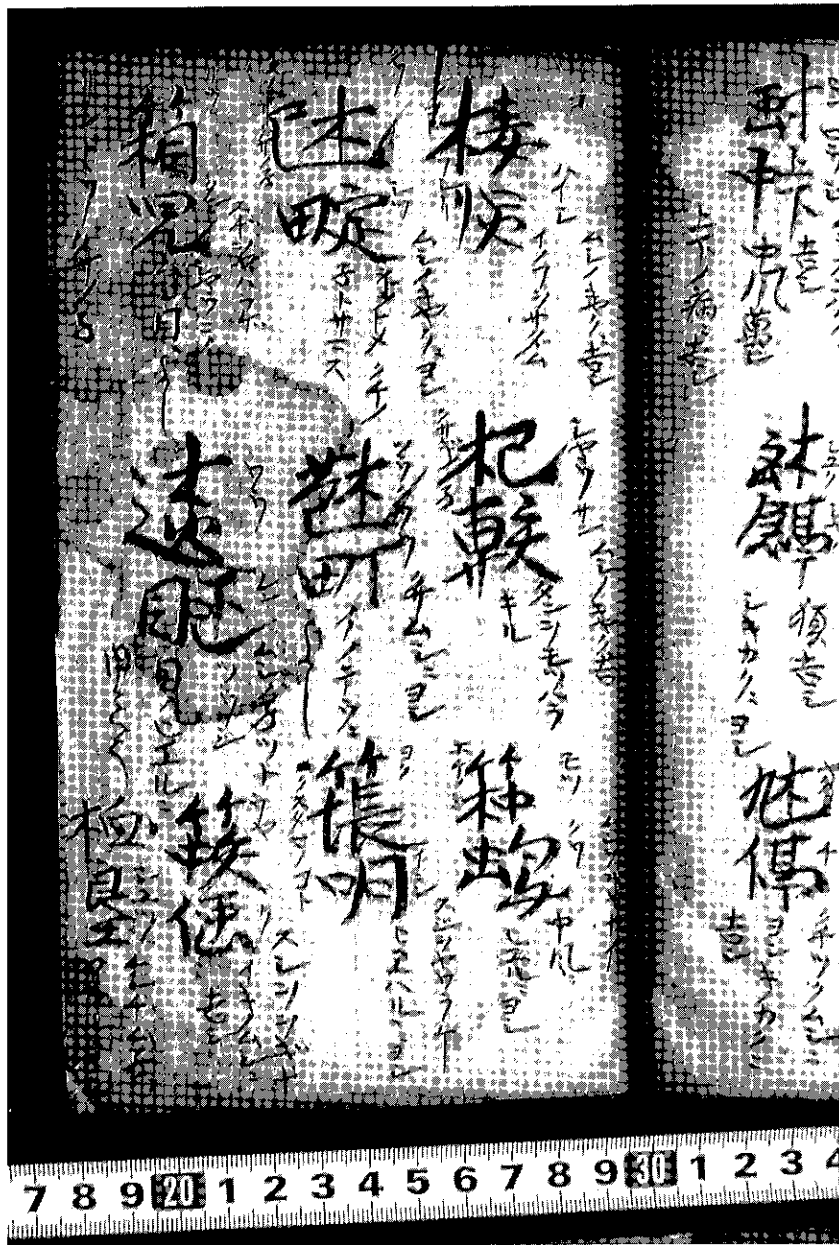


三オ

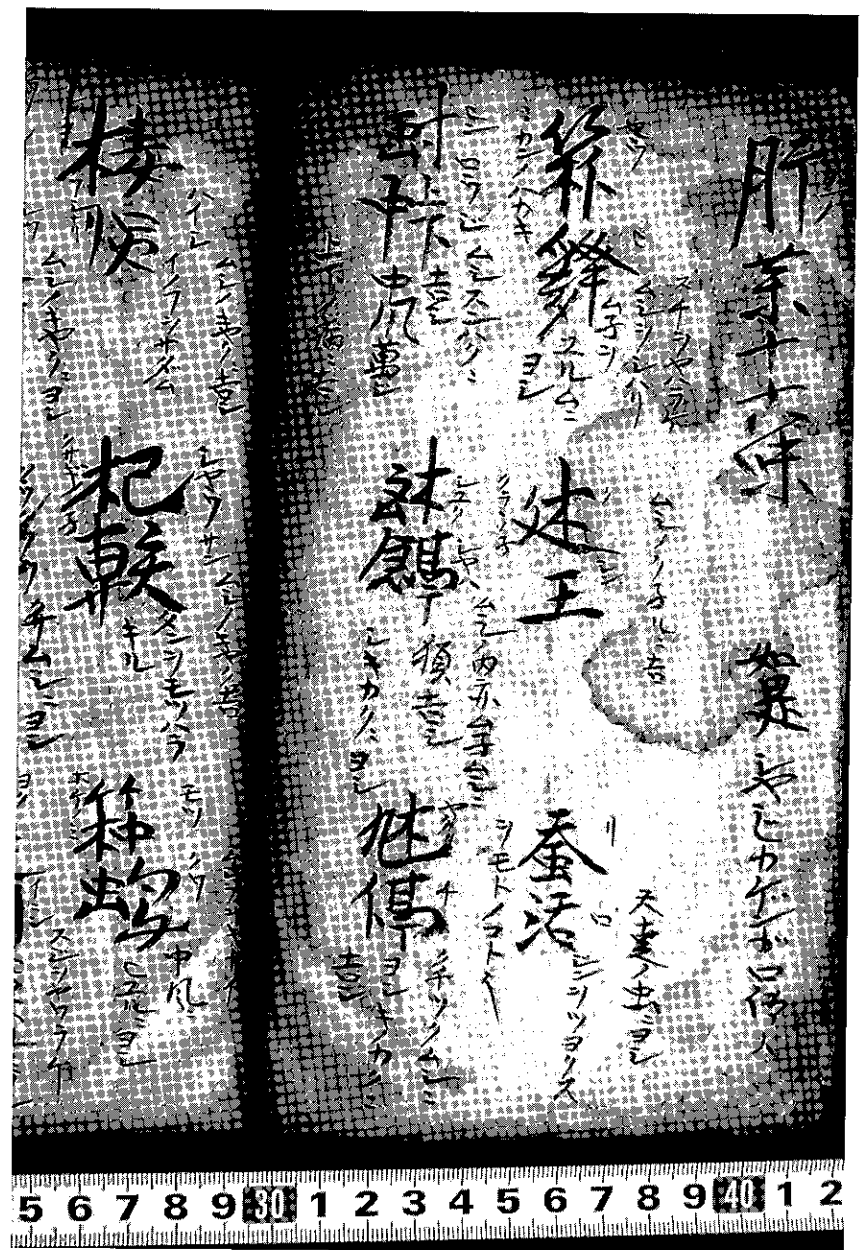


二ウ





五才



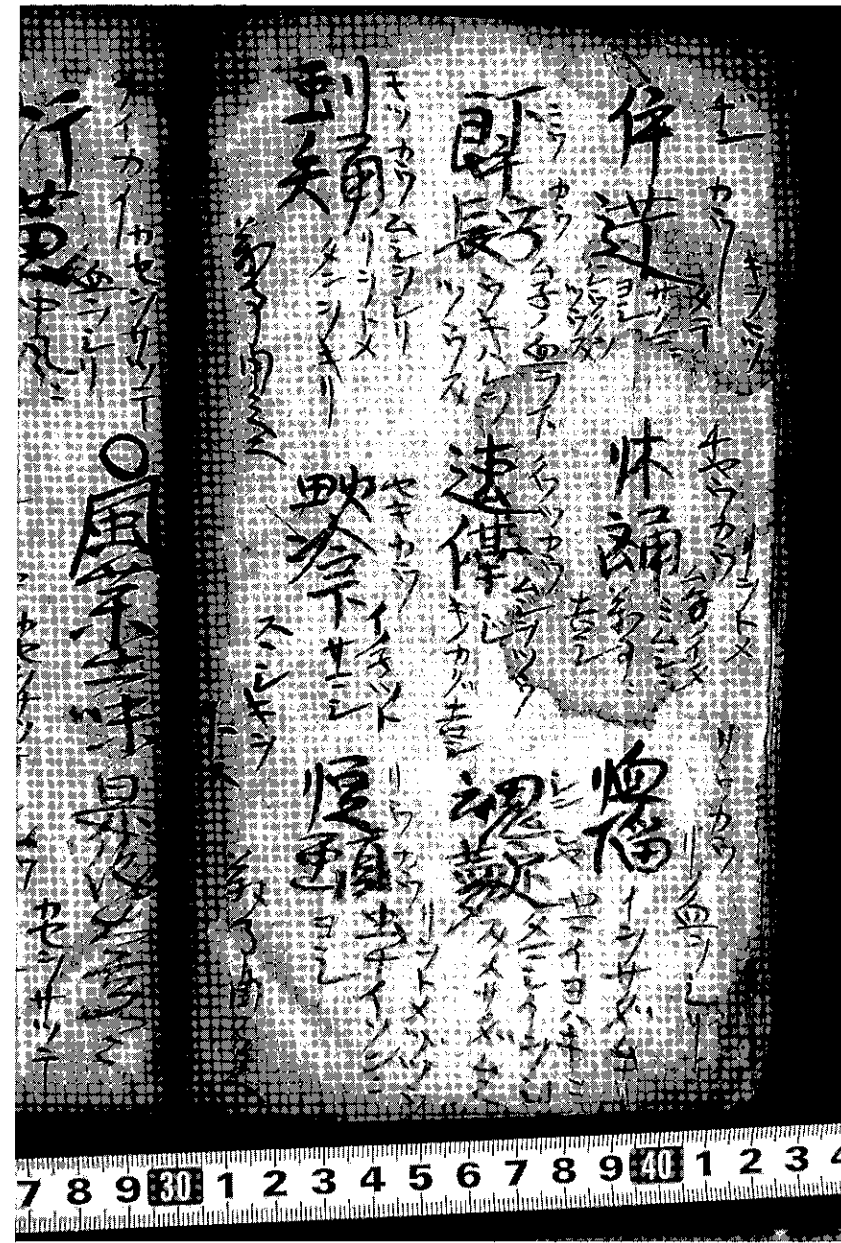
四ウ

六才

五ウ

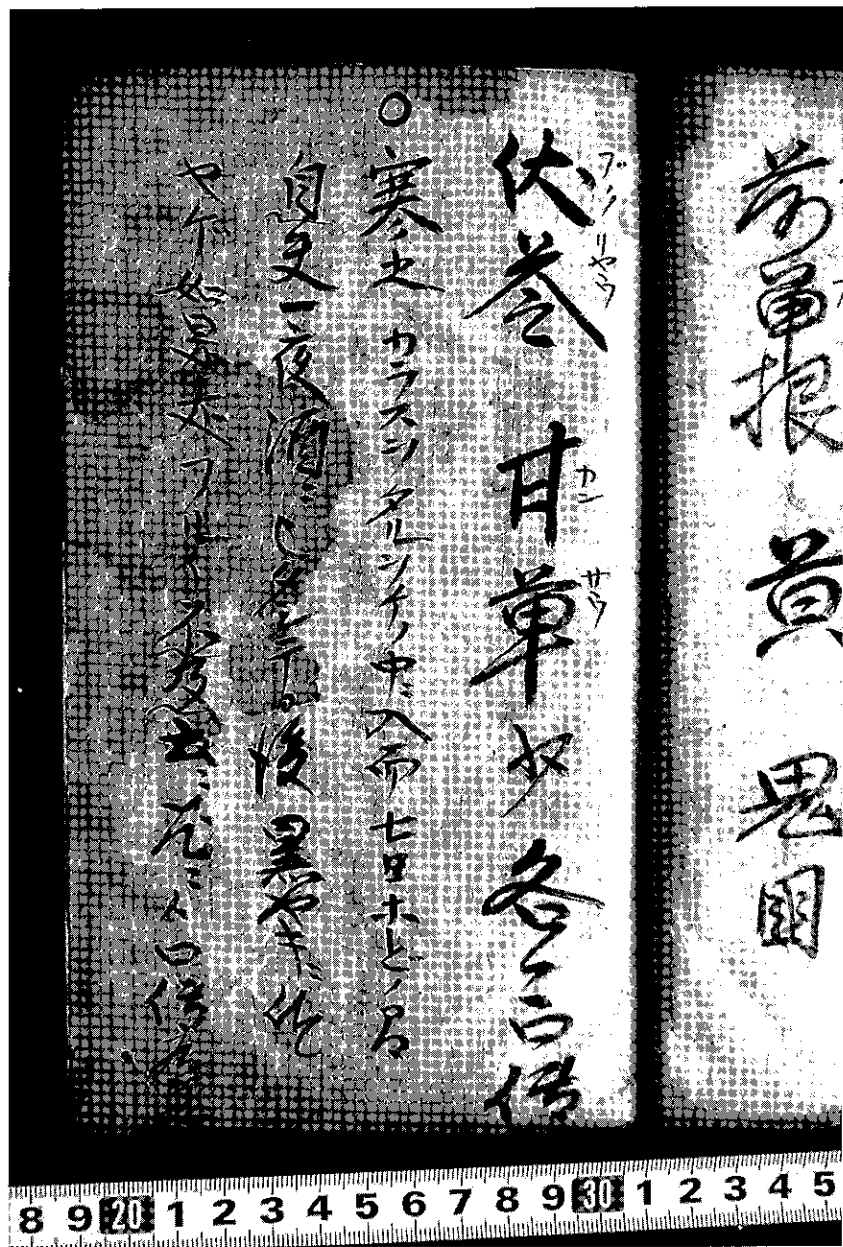


七オ

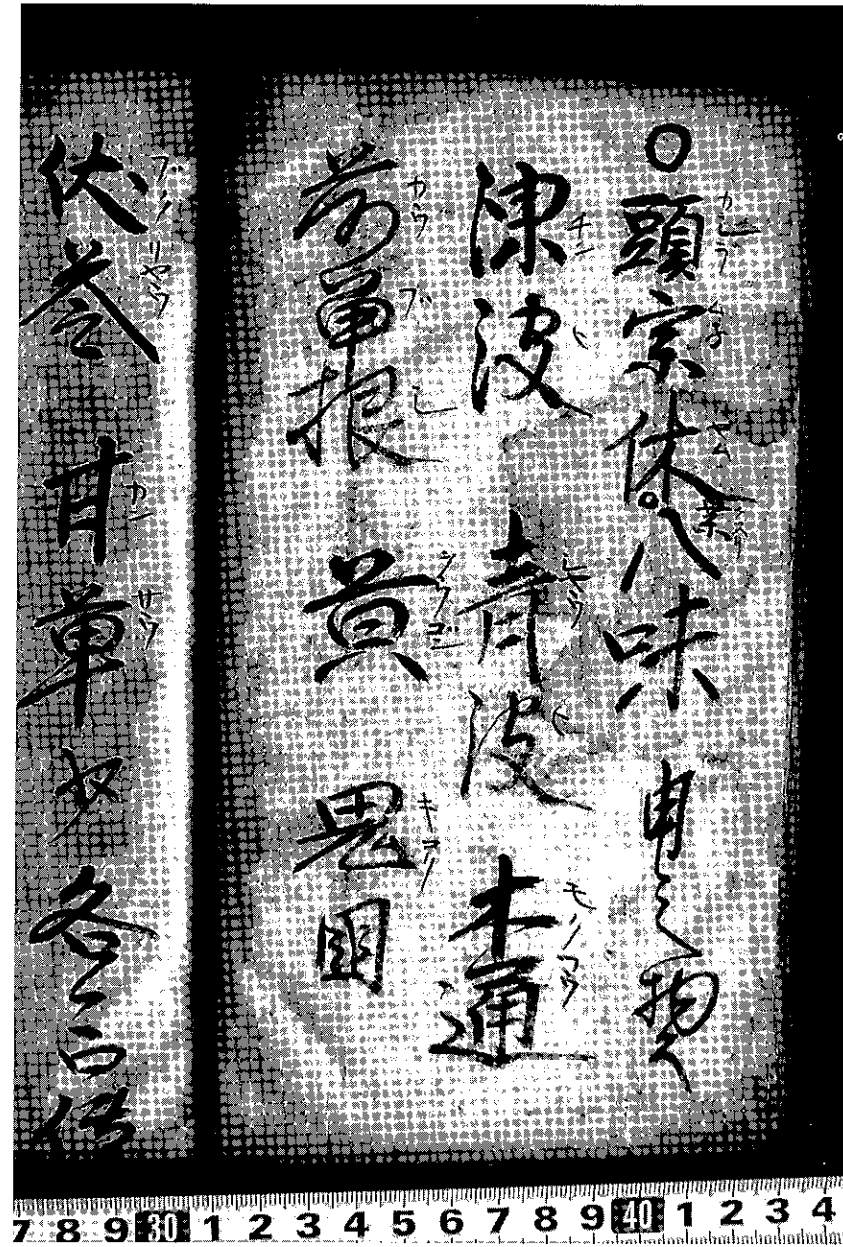


六ウ

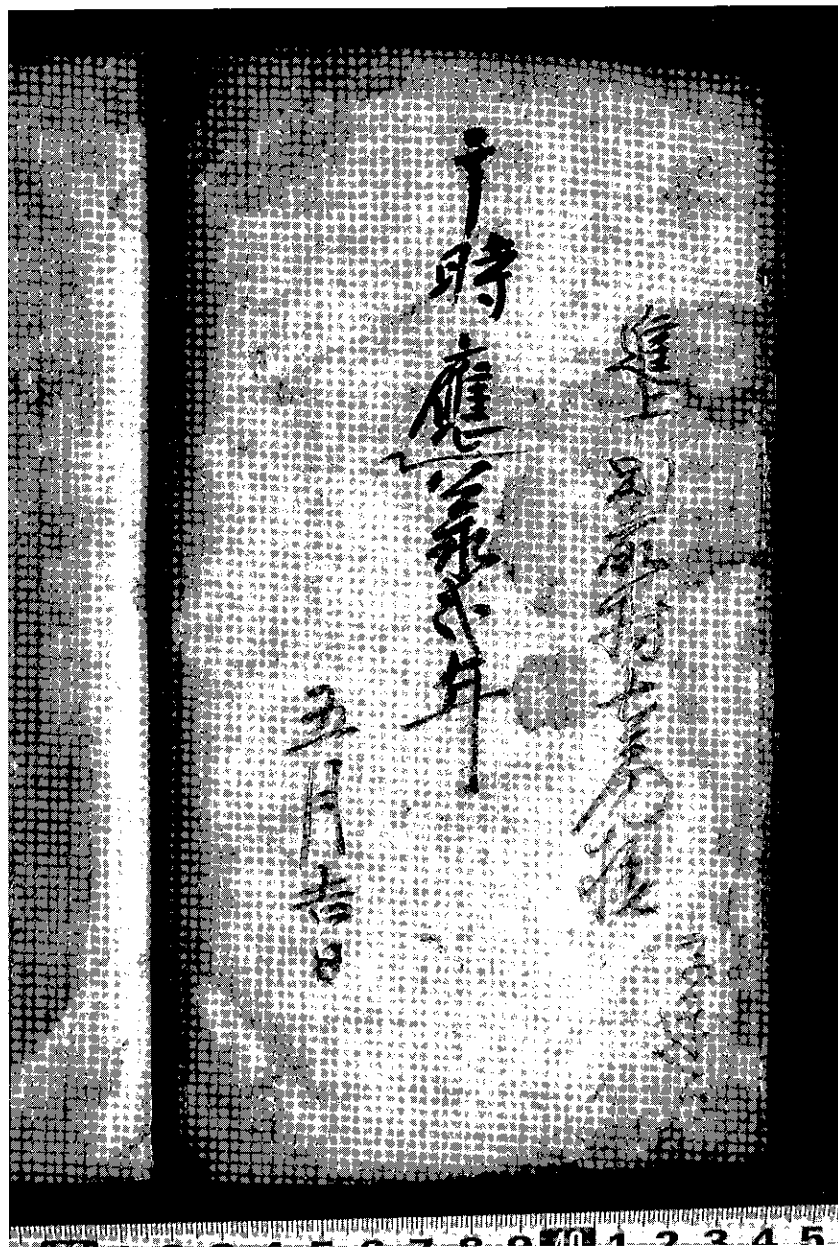




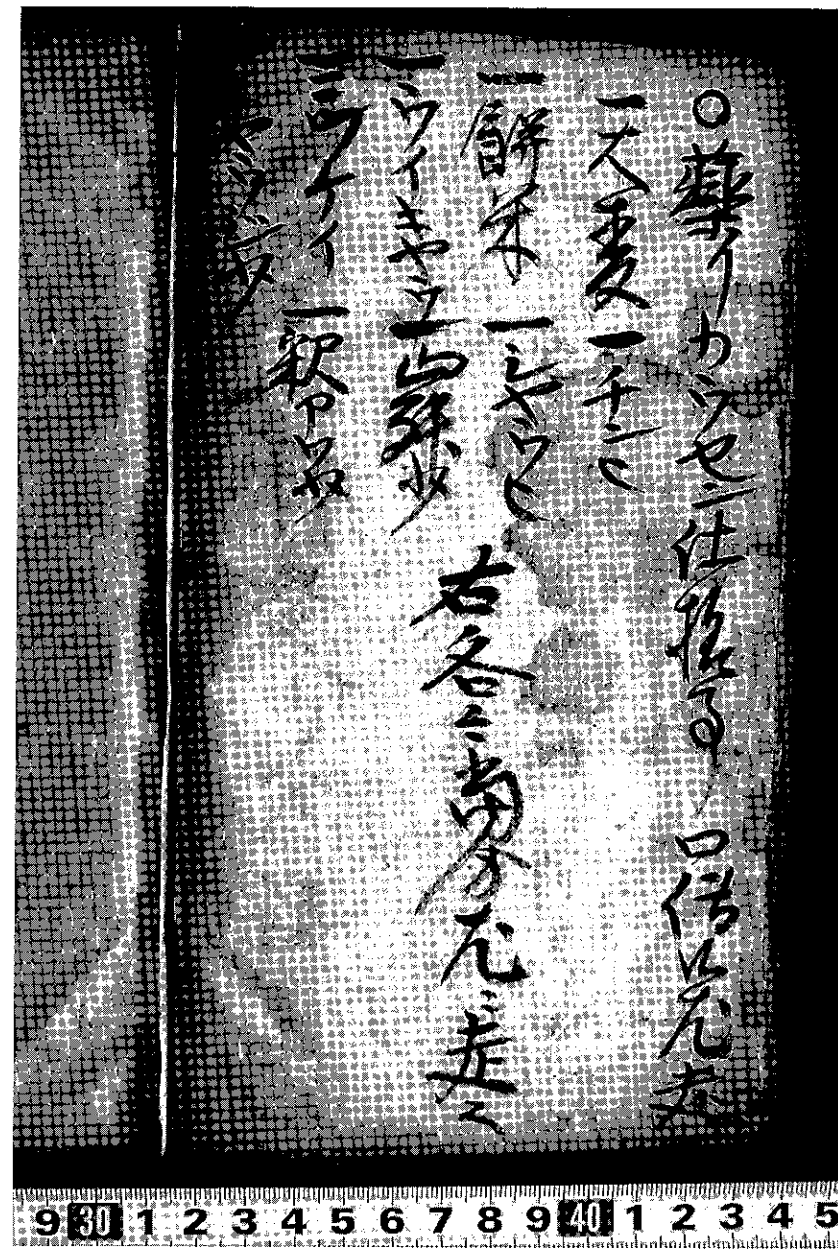
九才



八ウ



十ウ（裏表紙と見返しは省）



九ウ（十才は切り取られている）

編集後記

如何なる論拠に基づいたものかは明らかでないが、「近頃の子供は、文章が読めない、書けない。漢字が読めない、書けない。」という声をよく聞かされた。教育に携わる者は、この批判を耳にするたびに等しく心を痛めてきた。就中この批判は、国語教育に携わる者にとっては、わが身が責められるかの如くに胸に突き刺さって、激しい痛みを覚えさせた。

ところが、昨年四月に行われた全国学力調査の結果は、この痛みをいささか和らげてくれるものとなった。「国語A・B」の全国平均点は、小学校第六学年・中学校第三学年ともに、大方の予想を上回るものであって、今日行われている国語教育が、あながち誤りでなかったことを証明してくれた。

言うまでもなく、課題文の内容や設問の難易度によって平均点はいかようにも上下し、とりわけ漢字の書き取りは出題が少なかったから、この結果のみを見て全て良しと安心したわけではない。

また世間には、「基礎学力に比べ応用力が劣っている」などという訳の分からない非難さえあった。「どこの世界に、国語の応用力が基礎学力を上回るなどということがありうるのか」と逆に聞いてみたい気がしたが、それはともかくとして、国語教育に向けられている世間の目はそれほどに厳しく、更なる学力の向上が求められているということは事実である。かといって、児童生徒の学力の向上は、一朝にして図れるものではない。学力の向上には、教員の弛まざる創意工夫と、地道な指導の積み重ねが必須の要件として要求される。

我々の教え子たちは、学力調査の結果が良かったことを励みとして、学力の向上を更に図るべく日々邁進している。然らば、我々も気分を新たに、国語教育の明日を担う教員を育てるべく、熱意を持って地道な指導を続けていかなければなるまい。

(安東 記)

岐阜大学 国語国文学 第三十四号

二〇〇八年一月発行

編集 岐阜市柳戸一番一  
発行 岐阜大学 教育学部 国語教育講座

印刷 昭和ふりと

岐阜市岩崎一―二―一三  
☎二九四―八七八―